

スペシャリスト

青年期外来

慈恵病院 青木 省三 精神医学研究所所長



青年期外来のカンファレンスではさまざまな職種のメンバーが自由に意見を出し合い、青木省三医師(右端)と共に関わり方の方針を決める

自分はいかに生きるべきか、自分は何をしたのか。思春期から青年期にかけて、誰も思い悩み、漠とした不安に駆られる。多くの人はいつの間にか葛藤の時をくぐり抜け、自立への階段を上っている。

だが、堂々巡りで考え続け、沼からはい上がれなくなる人もい。学校に行けなくなれば「不登校」、部屋に閉じこもってしまうと「ひきこもり」。慈恵病院(岡山市南区浦安本町)で精神医学研究所所長を務める青木省三医師は40年間、そうした青少年と向き合い続けている。

生きづらさを抱える彼らの多くは、人が怖かったり、話をすることが難しかったり。妙薬があるわけではない。ゲーム、テレビ番組、ネット動画…何でもいい。青木医師は診察室でじっくり時間をかけ、言葉のキャッチボールを交わすきっかけを探る。

「教えてもらう」姿勢で聞き役になる。「ゲームをしていて知らないうちに街に出ていた」と話してくれた子に「どんなゲーム? どうやるの?」と尋ね、話を膨らませていく。部外者からは雑談に見えても「楽しいことが増えていくことが、元気になるためにすごく大事」なのだと言う。

1980年代、岡山大学病院精神科神経科に勤務していた頃に「思春期外来」の看板を掲げた。それまでの精神科医療は統合失調症やうつ病といったきちんと診断がつく患者を主に診ていたのに対し、青木医師はさまざまな症状や状態に悩んでいる若い人たちに関

わっていくことが必要だと考えていた。

同大助教授、川崎医科大学教授を経て、駆け出し時代に修業した慈恵病院に戻ってきた。大学病院でやり残した仕事を仕上げたいという思いで、今年5月から「青年期外来」チームを率いている。

目指すのは「診察室を外に開いていく」こと。診察室まで来られずに家で悶々としている人、時間がたつほど追い込まれ、外に出られなくなる人、どうやって手を差し伸べるか。そのために精神科医だけでなく作業療法士、看護師、心理士、精神保健福祉士ら多職種でつくるチームの力を発揮する。精神科専門のスタッフがそろった慈恵病院でこそできる体制だ。

毎週20人余りのチームメンバーが集まるカンファレンスで、1人ずつ担当する青少年の状況を報告



あおき・しょうぞう 広島大学附属高校、岡山大学医学部卒。慈恵病院、岡山大学病院精神科神経科助教授、川崎医科大学精神科教授を経て、今年4月から慈恵会精神医学研究所所長。川崎医科大学名誉教授。英国ベスレム王立病院青年期ユニットなどに留学。専門は青年期精神医学と精神療法。「ほくらの中の発達障害」(ちくまプリマー新書)など著書多数。

診察室を外に開こう

原点には自身の青少年時代がある。広島で育った義務教育、高校の頃はどろどろと「教室の中にいるのがしんどい」と感じ「家にこもるようになってしまった」と思っていた。だから、孤立感にさいなまれる青少年はひとことではない。「かつて自分が助けられたように、彼らに對してできることがあるのではないか。何とかして彼らを手とつなぎ、希望の灯りをともしてあげたい」

眼鏡の奥から見守るまなざしはどこまでも優しい。

(文・池本正人、写真・植木肇)

◇ 慈恵病院(☎086-262-1191)。青年期外来は毎週木曜日午後1時から5時まで。15歳から29歳の人が対象で予約が必要。

青年期外来チーム

